

小学校のスキー指導における学習内容の明確化と指導プログラムの開発

村田 雄大*・清水 将**・阿部 真一**・清水 茂幸**

(2019年2月15日受付)

(2019年2月15日受理)

Yudai MURATA, Sho SHIMIZU, Shinichi ABE, Shigeyuki SHIMIZU

Clarification of Learning Contents and Development of a Guidance Program
in Ski Instruction at Elementary School

要 約

スキー指導は、学習指導要領において、「自然と関わりの深い運動の指導」で、「学校や地域の実態に応じて積極的に行うこと」と明記されており、領域として定められていないため、具体的な学習内容は示されていない。そのため、学校教育におけるスキー指導の実施率が低下するとの懸念もある。本研究の目的は、学習内容を明確化し、指導プログラムとゲレンデの選び方を提案することで、小学校におけるスキー指導の意義や必要性を明らかにすることである。本研究では内容を2つに分け、実施状況調査とプログラム作成を行った。その結果、知識として用語を学習する重要性、「自然に親しむ」「公共施設でのマナー」などの体育以外の教育的価値、学習の場としてのゲレンデ選びの重要性が示唆された。そこで、「学習内容系統表」「カリキュラムマップ」「ゲレンデ・コース選定表」を作成した。

第1章 はじめに

積雪寒冷地における伝統的・代表的なスポーツであるスキーが、現在低迷しており、その大きな原因として、学校体育におけるスキー学習の実施率が低下していることが原因であるとの見方もある。「このことは明治期以降、日本のスポーツ普及が学校体育を基盤として発展してきたことを勘案すれば、長い目で見た場合、学校体育におけるスキーのみならず、広くスキーというスポーツ自体の盛衰にも影響を及ぼす可能性がある。また、現在、地域や学校・生徒の実態に応じた教育が求

められているということを考えれば、(中略)スキーなどの冬季スポーツが実施されない場合、学校体育における地域の特色とは一体どのようなものになるのであろうか。」と三浦ら(2006)は指摘している。

大学のスキー実習の効果に関する研究として、松尾ら(2016)は、協同性や社会人基礎力の向上を示しており、永井ら(2017)は、「受講生がスキーの幅広い楽しみを実感したことや、効果的な学習を通じて技能レベルを向上させ、スキーの知識や技術に対する自信とスキーに対する実践意欲を高めたことが確認された。」としている。スキー

* 岩手大学大学院教育学研究科教職実践専攻・** 岩手大学大学院教育学研究科

指導は、子どもたちの心身の成長を促すだけでなく、生涯に渡って運動に親しむ資質・能力の育成、ひいては、スキー場の活性化が地域経済にも貢献するなど、なくてはならない学習である。

一方で、スキー学習を実施するにあたって、いくつかの困難さが挙げられる。三浦（1988）は、「担当生徒数」「経済的負担」「実施場所」「学習時間の減少」をアルペンスキー授業の問題点を挙げている。そのほか指導者数、安全確保などの人的負担、技術のみに偏重した指導などの問題も指摘されている。平成29年告示の小学校学習指導要領解説体育編では、「自然と関わりの深い運動の指導」で「学校や地域の実態に応じて積極的に行うこと」としており、スキー指導は、領域として定められていないため、必ずしも実施しなくてもいいことになっている。また、伊藤・栗林（1988）の研究では、自校の指導内容を作成している学校があることは、明らかになっているが、その具体的な内容は示されていない。加えて、スキーの技術に関する研究や文献は、多数存在するが、学習の場としてのゲレンデ選びについての研究は見当たらない。

そこで、小学校のスキー学習の現状・課題を把握し、学習内容を明確化するとともに、系統的な指導を行うためのプログラムの開発や、レベルや人数など、実態に応じたゲレンデ選びを提案するために、本研究の主題を設定した。

第2章 研究方法

（1）岩手県内小学校9校のスキー学習に同行し、スキー指導を行うとともに、そのうちの7校に聞き取り調査を行い、実施状況を把握した（表1）。

表1 スキー指導を行なった小学校

2018/1/24 A小学校6年生	2018/2/6 F小学校3年生
2018/1/26 B小学校5年生	2018/2/7 G小学校4年生
2018/1/30 C小学校3年生	2018/2/8 H小学校4年生
2018/1/31 D小学校4年生	2018/2/9 I小学校3年生
2018/2/2 E小学校5年生	

（2）上記の調査や先行研究、学習指導要領をもとに学習内容系統表と、カリキュラムマップ、単元計画、ゲレンデ・コース選定表を作成した。

第3章 研究内容

（1）実施状況の調査結果と考察

ア 調査結果

（ア）指導・評価計画の有無（図1）

観点別の指導・評価計画があると回答した学校は、7校中2校。技能のみ指導・評価計画があると回答した学校は、7校中2校。明文化されたものはないと回答した学校は、7校中3校であった。

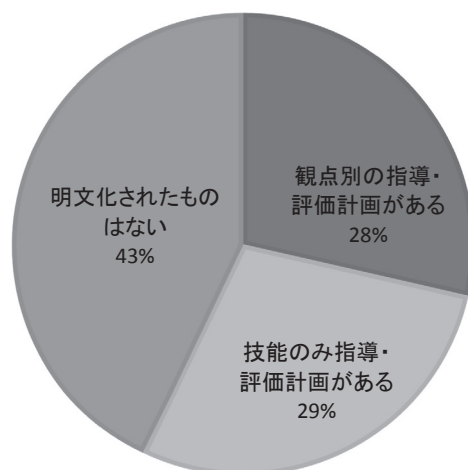


図1 指導・評価計画の有無 (n=7)

（イ）スキー指導の時数（表2）

スキー指導の時数は、1学年あたり7～12時間でカウントしていた。

全ての学校で、校庭でのスキー指導を体育としてカウントしていた。スキー場でのスキー指導を体育のみでカウントしている学校は、7校中2校であった。体育と特別活動を合わせてカウントしている学校が7校中4校で、7校中1校（G小学校）は、中学年がスキー場に行く時間を全て特別活動としてカウントしていた。

1年生からスキー指導を実施している学校が7校中3校、2年生から実施している学校が、7校中2校、3年生から実施している学校が、7校中2校であった。

表2 スキー指導時数カウント(単位：単位時間)

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	平均
A小学校	8	8	8	8	7	7	8
B小学校	8	8	8	8	8	8	8
C小学校	6	6+2	6+2	6+2	6+2	6+2	8
D小学校	0	8+3	8+3	7+3	4+3	3+3	9
E小学校	0	8+2	8+2	8+2	8+2	8+2	10
F小学校	0	0	8+2	8+2	8+2	8+2	10
G小学校	0	0	8+4	8+4	6+3	6+3	11
平均	7	9	10	9	8	8	9

※+(プラス)は特別活動としてカウント。それ以外は体育としてカウント。
網掛けは、スキー場での学習を特別活動のみでカウント。

(ウ) スキー指導のねらい (図2)

複数回答可で聞き取り調査を行った。7校中全ての学校が「冬期間中の運動量確保」と回答した。次いで7校中6校が「自然に親しむ」こと、7校中4校が「公共施設でのマナー」、7校中3校が「集団行動」、7校中2校が「地域の特性を活かした授業」「用具の安全な取り扱い」「仲間との協力」、7校中1校が「感謝の気持ちを伝える」と回答した。

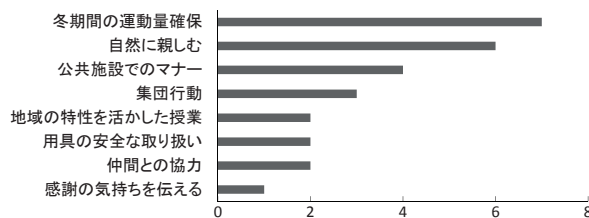


図2 スキー指導のねらい n=7(複数回答可)

(エ) ゲレンデを選ぶ基準 (図3)

複数回答可で聞き取り調査を行った。7校中全ての学校が「初心者向けかどうか」と回答した。次いで7校中3校が「学校からの距離」、7校中1校が「幅が広

いコース」「教員が知っているゲレンデ」「混み具合」「客層」「昼食代の安さ」「小学生のリフト代の安さ」と回答した。

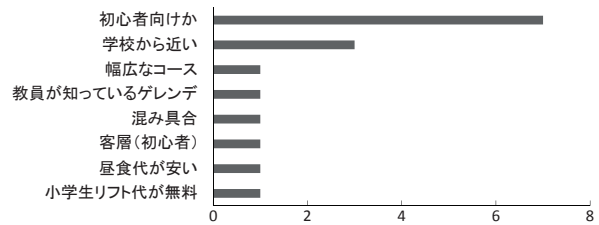


図3 ゲレンデを選ぶ基準 n=7(複数回答可)

(オ) 指導体制

スキー学習に同行し、調査した結果、グループ編成、1グループあたりの指導者数と児童数、指導形態について明らかになった。

9校中9校が習熟度別に児童を分けてグループを編成していた。

1グループあたりの指導者数は、どの学校も1人か2人であった。また、指導者は、教員とボランティア(保護者、インストラクターなど)であった。2人で1グループを担当している場合は、ボランティアだけで担当する場合と、ボランティアと教員で担当する場合があるが、

ボランティア1人に必ず教員1人が担当するようにしている学校もあった。

1グループあたりの児童数は、3~10人だったが、指導者1人で児童6人を超える人数を担当しているところはなかった。また、兄弟グループを編成し、2人で2グループを合わせて担当する場合もあった。

また、どのグループにおいても児童同士の関わりが少ない教師対児童の指導形態であった。

(カ) 評価体制

評価は、校庭でのスキー指導だけにしている学校と、校庭とスキー場の両方を評価対象にする学校があった。校庭とス

スキー場の両方を評価対象にする学校では、評価をボランティアに任せている学校と必ず教員が行う学校があった。また、評価の妥当性を保証するために、スキー場でのスキー指導では、午前と午後で指導者を交代し、複数の指導者の目で評価する取り組みをしている学校もあった。

(キ) スキー指導の存続

聞き取り調査を行った7校中2校で、保護者に、スキー学習の継続に関するアンケートを行っていた。どちらの学校もほとんどの保護者が、「ぜひ続けて欲しい」と回答するという結果だった。

イ 調査結果に対する考察

(ア) については、指導・評価計画が技能だけ、または、無いと回答した学校があるということからも、観点別の指導プログラムの必要性が言える。

(イ) と (ウ) について、スキー指導は、体育として行っていたり、特別活動として行っていたり、体育と特別活動を合わせて行っていたりと、学校の実態に応じて様々な扱われ方がされている。体育として行う根拠は、「自然と関わりの深い運動の指導を推奨している」と、平成29年告示の小学校学習指導要領解説体育編に明記してあることが挙げられる。特別活動として行う根拠は、健康安全・体育的行事の「心身の健全な発達や健康の保持増進、事件や事故、災害等から身を守る安全な行動や規律ある集団行動の体得、運動に親しむ態度の育成、責任感や連帯感の涵養、体力の向上などに資するようにすること」や遠足的行事の「平素と異なる生活環境にあって、見聞を広め、自然や文化などに親しむとともに、よりよい人間関係を築くなどの集団生活の在り方や公衆道徳などについての体験を積むことができるようにすること」が、

平成29年告示の小学校学習指導要領解説特別活動編に明記してあることが挙げられる。また、体育の年間計画の中で、他領域とのバランスを図るために、スキー指導全時間を体育のみでカウントすることができない、体育としての評価の妥当性を保証しづらいなどの理由から、体育だけでなく、特別活動としてカウントしているという事実もある。一方で、体育の中でも領域として確立されていないスキー指導が、「教科のように具体的な内容までは示されていない」特別活動として行われることによって、他の学校行事等との兼ね合いから、スキー指導を学校として行う意義が問われ、最終的には、教育活動からなくなってしまう可能性もある。

(エ) について、スキー指導を実施するゲレンデは、リフト代やバス代など、学校経営の視点でも選ばれているが、結果にも示されているように、ほとんどの学校で、初心者向けのコースがあるかを基準としている。現時点でも既に、児童の実態と安全面を考慮している学校がほとんどであるが、初心者向けの捉えは、各学校や教員によって異なる。そのため、ゲレンデ・コースを選ぶ基準となるものがあれば、今後、スキー場を選ぶ上での参考になるであろう。

(オ)(カ)(キ)について、指導体制については、結果から分かるように、ボランティアに支えられているという現状がある。しかし、ボランティアが何を指導して評価すればいいのかがわからないまま任せきりでは、授業としてのスキー指導ではなく、レクリエーションとなってしまうだろう。また、「スキー学習を続けて欲しい」という保護者アンケートの結果もあるが、三浦(1988)が指摘しているように、指導者数確保という課題もある。その背景は多様であると考えられるが、保護者の中

でも、スキー用具を持っていないという経済的な理由、スノーボードしかやることができない、そもそもスキーを滑ることができないなどの経験不足などが挙げられる。今後、スキー指導を充実させるためには、ボランティアの活用の仕方を再検討する必要があると考えられる。

以上のことを踏まえ、冬季スポーツとしてのスキーの価値を学校教育に生かすためには、体育の領域に準ずるものとしてスキー指導を確立する必要があると考えた。さらに、各学校のスキー指導のねらいの中に「自然に親しむ」ことや「公共施設でのマナーを学ぶ」という項目が挙げられていたように、スキーには体育以外の学びもあることから、他教科との関連付けも必要である。加えて、学習者の安全確保、効果的な指導実現のために、ゲレンデの選び方も大切である。そこで、「学習内容系統表」「カリキュラムマップ」「ゲレンデ・コース選定表」を作成することとした。

(2) 学習内容の明確化と指導プログラムの開発

ア 学習内容系統表

学習内容を明確にするために、体育科におけるスキー指導の学習内容系統表を作成した(図4、図5)。

「知識」では、学習指導要領にも示されているように、どの学年においても「運動の行い方」が大切である。その内容については、各学年に定めた技能の段階に伴い変

化していく。日本スキー指導教本(1981)で「言語による指導」が示されているように、本研究では、「運動の行い方」に加え、用具や場、技術に関する「用語」や「名称」についても理解する必要があることがわかった。例えば、指導をする際に、こそあど言葉で使うと、児童が混乱しやすいことがある。これは、一人一人が思う「こっち」や「あっち」が異なることによるもので、本当に見てほしいところ、向いてほしい方向に目が向けられていないという状況になってしまう。通常の体育の授業では、色が異なるコーンを置いて、「赤いコーンの方を見て」「黄色いコーンの前に集合」などのような指示を出すという工夫もできる。しかし、ゲレンデにコーンを置くことはできないし、いつでも目印になるものがあるとは限らない。「フォールライン」や「山側」「谷側」などの共通言語を使用することで、斜面での立ち上がり方や荷重の仕方などの「技能」、斜面に応じた滑り方を工夫するなどの「思考力、判断力、表現力等」、スピードコントロールをして安全に滑ろうとする「態度」の向上にもつながり、学習指導におけるマネジメントがしやすくなる。

平成29年告示の学習指導要領では、主体的・対話的で深い学びが重要視されている。体育でも同様に、「考えたことを友達に伝えること」や「友達の考えを認め」ることなど、他者と関わり合いながら学習することが示されている。スキー指導も例外

技能	知識	思考・判断・表現	態度
1・2年生 スキーを履いて、平地を歩いたり、斜面を登ったりすること。 斜面で真っ直ぐ滑ったり、止まったりすること。(ブルーク滑降)	運動の行い方を知るとともに、スキーの用具の扱い方や名称について理解すること。(「エッジ」「ストック」など)	スキーを履いた簡単な遊び方を工夫するとともに、考えたことを友達に伝えること。	運動遊びに楽しんで取り組み、順番やきまりを守り誰とも仲良く運動したり、場や用具の安全に気を付けたりすること。
3・4年生 斜面で横切るように滑ったり、曲がったり、止まったりすること。(ブルークターン)	運動の行い方を知るとともに、運動する場についての用語を理解すること。(「山側」「谷側」「フォールライン」など)	自己の能力に適した課題を見つけ、動きを身に付けるための活動を工夫するとともに、考えたことを友達に伝えること。	運動に進んで取り組み、きまりを守り誰とも仲良く運動したり、友達のを認めたり、場や用具の安全に気を付けたりすること。
5・6年生 斜面でスピードをコントロールしながら滑ったり、曲がったり、止まったりすること。(シュテムターン)	運動の行い方を知るとともに、技術の名称を理解すること。(「シュテムターン」「荷重、抜重」など)	自己の課題に適した課題解決の仕方や斜面に応じた滑り方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えること。	運動に積極的に取り組み、約束を守り助け合って運動したり、仲間の考えや取組を認めたり、場や安全に気を付けたりすること。

図4 学習内容系統表

技能		知識	思考・判断・表現		態度
1・2年生	ブルーク滑降	運動の 行い方	用具	自分の考えを 形成	感情や 行動を 統制
3・4年生	ブルークターン		場	課題解決	安全 協働
5・6年生	シュテムターン		技術	創造	

図5 学習内容系統表(キーワード)

ではない。松本ら（2016）は、バディシステムを用いることによってスキー技術や社会的スキルが向上するという研究成果を出している。しかし、スキー指導の指導体制として、児童同士の関わりが少ないという結果があった。スキーを行う上で、技能習得は確かに重要であるが、いわゆる「教え込み」だけでは、「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」を育んでいくことはできないだろう。スキー指導においても、課題解決や創造するなどの「思考力、判断力、表現力等」、互いに多様性を認めることや協働することなどの「学びに向かう力、人間性等」を明確化し、計画的に指導していく必要がある。そこで、学習内容系統表をもとに5年生の単元計画の例を示した（図6）。

	1～4時間目	5時間目（校庭）	6～10時間目（スキー場）
0分		準備体操	創造
		8の字スケーティング	斜面に応じてターン弧やスピードをコントロールする
		荷重動作（斜面で）	斜面上でターン弧やスピードをコントロールする
45分	安全	後片付け	準備体操
		ふり返り	ふり返り

図6 単元計画（5年生の例）

実施調査の結果にも示したが、スキー指導は、習熟度別のグループに編成されて行われている。今回作成した学習内容系統表では、学年別に学習内容を示しているが、例えば、3年生の上級班の児童がシュテムターンをすでに習得しているということは、十分想定される。その場合は、班の児童の実態に応じて、高学年の内容を行うといったように、弾力的にこの系統表を取り扱っていくべきものだと考える。ただし、ここで注意したいのは、「技能」は、積み上げることはできるが、「知識」は、必ずしも積み上げ式ではないということである。例えば、シュテムターンができれば、プルークターンやプルーク滑降はできる。

しかし、「荷重・抜重」という知識を獲得しているからといって、「フォールライン」について理解しているとは限らない。また、「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」は、学習の仕方や安全管理能力、人間関係に関することであり、スキーの技能と直接的には関わりのないことである。そのため、仮に、3年生の児童が6年生レベルの技能を身に付けていたとしても、「技能」以外の観点については、6年生の内容ではなく、あくまでも、3年生の児童の実態に応じて指導することが大切である。

イ カリキュラムマップ

他教科との関連付けを図るものとして、カリキュラムマップを作成した（図7）。

	4月	スキー指導（10時間）	3月
体育		自然との関わり深いスキー	
保健		けが	
理科			天気
道徳		自然	自然
家庭科	衣服（夏）		衣服（冬）

図7 カリキュラムマップ（5年生の例）

スキー指導では、保健での怪我の予防はもちろん、理科での冬の天気、道徳の自然に関するこ
と、家庭科での衣服の調整などの単元での学習を活用したり結びつけたりすることで、それぞれの学びを一般化、概念化して、資質・能力の育成に効果をもたらすことができる。単元計画に「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」を位置付けることはもちろん、それぞれの活動に各教科の学習内容を関連づけることができる。また、各教科の授業においてもスキー指導での体験を各教科の見方・考え方でふり返り、学びを深めることができる。その具体例として、カリ

キュラムマップをもとに5年生の単元計画の例を示す（図8）。

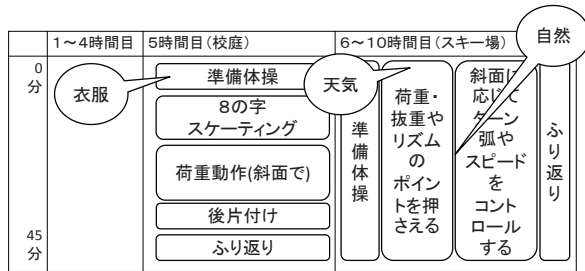


図8 単元計画(5年生の例)他教科との関連

ウ ゲレンデ・コース選定表

学習者に合わせた場でスキー指導を行うために、ゲレンデ・コース選定表を作成し

スキー場・コース(例) 選定理由		
1年生	八幡平リゾート パノラマスキー場 ビギナーパーク(斜面約5度)	・歩いて登れて、滑っても勝手に止まれる斜面。
2年生 3年生 4年生	岩手高原スノーパーク 初級コース サンモリツ(平均斜面8度)	・緩斜面で、スピードが出にくい斜面。また、コース幅が広いので安全面に配慮しやすい。
5年生 6年生	岩手高原スノーパーク 中級コース スノーレー第2(平均斜面11度)	・コース幅が広く安全に配慮しやすい。中級コースでスピードが出やすいので、スピードコントロールや荷重の仕方などを学習しやすい。

図9 ゲレンデコース選定表

た（図9）。

スキーを初めて学習する1年生では、歩いて登れて、滑って降りても平らなところで自然と止まるような斜面で学習することが望ましい。2～4年生では、平均斜面8度ほどのスピードが出ない緩斜面が望ましい。また、幅が広いコースで行うことで、安全面を確保するとよい。高学年では、幅が広いコースで安全面を確保するのはもちろんだが、ある程度スピードを出しやすい斜面で行うことで、スピードをコントロールしたり、斜面に応じたターンを工夫したりすることが望ましい。

ゲレンデ・コース選定表は、学習内容系統表と関連させて活用する。1・2年生では、ブーツの履き方、スキー板での歩行から始まり、斜面をプルーク姿勢でまっすぐ滑ることが学習内容となる。滑り降りると

いうことを学習したのちに、止まり方、曲がり方と展開していくため、止まり方を知らなくても自然と止まるくらいの緩やかな斜面や後半が平らになっている斜面が求められる。2年生では、止まり方が学習の中心となるため、スピードが出にくく、止まりやすいくらいの緩やかさが大切である。3・4年生では、曲がり方を学習する。2年生と同じくらいの斜面でもいいとしているのは、うまく曲がれなかった時に、スピードが付きすぎてけがをするのを防ぐためである。5・6年生では、スピードをコントロールしながら、滑り方を工夫することが学習内容である。そのため、4年生までの斜面より少し急な斜面で、スピードを制御して安全に滑ったり、長く滑り続けるためにスピードに緩急を付ける工夫をしたりすることが求められる。

前述の通り、スキー指導は習熟度別グループで行われる。しかし、スキー指導を実施するスキー場は、学年や学校ごとに決められており、学校経営上、技能の差に関係なく同じ学年（学校）の児童は、同じスキー場に行くという現実がある。そのため、多様な斜面があるスキー場に行くことが望ましい。

ゲレンデ・コース選定表を活用する上で注意したいのは、例示したスキー場・コースは、参考程度であるということである。該当するスキー場で行うことが必ずしも望ましいということではなく、斜面や広さをもとに、盛岡近郊のみならず、岩手県内、あるいは、日本各地のスキー場や校庭、学校に近い自然環境に当てはめて、学習の場を広く設定することが必要である。

第4章 成果と課題

実施状況の調査結果から、以下のようなことが明らかになった。

- 特に技能以外に関して、系統的な指導プログラムが確立されていなかった。
- スキー指導を体育だけでなく特別活動としてもカウントしている学校があった。
- スキー指導のねらいには、「自然に親しむこと」や「公共施設でのマナー」など、体育以外の学習内容も含まれていた。

また、実施調査と先行研究等を踏まえ、学習内容の明確化と指導プログラムの開発を以下のように行った。

- 「学習内容系統表」を作成し、「技能」「知識」「思考力・判断力・表現力」「態度」の4観点で、小学校低、中、高学年における学習内容を明らかにした。
- 運動の行い方だけでなく、学習に必要な用具や運動する場についての知識を明らかにした。
- 「カリキュラムマップ」を作成し、スキー指導と各教科との関連付けを行う例を示した。
- 「ゲレンデ・コース選定表」を作成し、学習者に合わせた斜面選びができるようにした。

さらに、本研究の課題として、以下のことが挙げられる。

- 他者と協働しながら課題解決する力を育むために、「思考力・判断力・表現力」「態度」の学習内容を意識した授業展開を明らかにする。
- 小学校の発達段階を踏まえて、技能や経験の違いによるグループ分けの仕方を明らかにする。
- 技能や能力差に応じた適切な指導内容とゲレンデの選択の仕方を明らかにする。

今回の研究では、小学校のスキー学習に同行し、スキー指導を行い、聞き取り調査を行うことで、

スキー指導の実施状況を知ることができた。また、実施調査と先行研究等を踏まえ、学習内容の明確化と指導プログラムの開発を行うことができた。しかし、上述したように課題も明らかになった。

課題の一点目は、学習内容系統表をもとにした具体的な学習活動を明らかにすることである。特に、「思考力・判断力・表現力」「態度」に関しては、「技能」と「知識」に比べ、実際何をすれば学習内容を指導したことになるか、学習内容系統表を見ただけでは、イメージしづらい。前述したバディシステムのような方法も研究されているので、様々な先行事例を参考にしながら明らかにしていきたい。

二点目は、妥当性のあるグループ編成を明らかにすることである。習熟度別に学習を進めていくスキー指導では、そのグループ分けの妥当性が大切である。校庭の学習だけでは、判断が難しいので、スキー場に行ってから編成することもあるが、早い段階でグループが固定されれば、児童も劣等感や退屈さを感じることなく、スムーズに学習を進めることができるだろう。武下ら(2001)は、大学生対象で、スキー実習のグループ編成の妥当性について研究している。小学生が対象でも、スキー場に行く前から正確なグループ編成をする方法について検討していきたい。体育全般におけるグループ編成に関しては、ユニバーサルデザインの視点から、異質な能力の児童同士で一つの班を編成する傾向があるので、スキー指導においても習熟度別ではなく、技能差がある児童同士でのグループ編成の可能性も探していきたい。ただし、そのようなグループは、安全を確保するのが難しいという現実もあるので、安全性も含めしっかりと検討していきたい。その他、グループ編成については、1グループの人数や指導者の数など、様々な視点から検討を進めていきたい。

三点目は、実現可能なゲレンデ選びを明らかにすることである。学習内容と関連させ、ゲレンデ・コース選定表を示し、児童の技能差に対応するためには、多様な斜面があるスキー場が望ましいとした。しかし、移動距離や費用などの問題から必

ずしもコースがたくさんあるスキー場に行けるとは限らない。児童の実態に応じた適切な学習内容を吟味し、限られた環境でいかに効果的に指導していくことができるかを検討したい。

本研究では、「学習内容系統表」「カリキュラムマップ」「ゲレンデ・コース選定表」を作成したが、検証するところまでは至らなかった。今後は、実践を通して、プログラムの有効性や妥当性を明らかにしていきたい。

〈引用文献〉

- 伊藤 章一・栗林 徹 (1988). 岩手県内の小学校における冬期体育（スキー）実施状況の調査. 教育工学研究 10 pp175-185
- 片山 昭義・中島 悠介 (2015). 福祉系大学におけるスキー実習の学習効果に関する一考察: 事前講習の意義と実習本番に与える影響について. 浦和大学・浦和大学短期大学部 浦和論叢 53 pp69-84
- 財団法人日本スキー連盟 (1981). 日本スキー指導教本. スキージャーナル
- 武下 正次・大内 茂実・志村 邦義・西垣 昭・安倍 希美 (2001). 「スキー実習におけるグループ編成に関する研究」-学内授業におけるグループ編成の妥当性について-. 日本体育学会大会号 52 pp530
- 竹田 唯史・近藤 雄一郎 (2018). 小学校教員の誰もが指導可能なスキー教授プログラムの作成 (第2報) 小学校教員を対象としたスキー指導講習会による教授プログラムの評価. 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要 9 pp99-105
- 永井 将史・東山 昌央・大石 示朗・本田 宗洋 (2017). 本学スキー実習の取り組みと学習成果に関する報告. 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要 52 pp119-126
- 松尾 美香・西村 次郎・山崎 めぐみ・望月 雅光 (2016). 大学における自然体験学習のねらいとその教育効果に関する研究-スキー実習を対象にして-. 岡山理科大学紀要 52 pp49-59

松本 裕史・中西 匠 (2016). バディシステムを活用したスキー指導が女子学生のスキー技術の向上に及ぼす効果-協同学習の視点からの考察-. 武庫川女子大紀要 (人文・社会科学) 64 pp71~77

松本 裕史・中西 匠・西田 順一・柳 敏晴 (2016). バディシステムを用いたスキー実習が女子大学生の社会的スキルに及ぼす影響: 問題解決因子およびコミュニケーション因子の変化に着目して. 健康運動科学 6 (1) pp23-29

三浦 裕 (1988). 歩くスキー授業の学習指導計画の研究. スポーツ教育学研究8(2) pp53-64

三浦 裕・高橋 一徳・伊藤 徳之・掘口 創平 (1997). 小規模校におけるスキー授業の改善・充実 -新十津川町立花月小学校におけるアルペンスキー, 歩くスキー併用授業- 僻地教育研究 51 pp1-8

三浦 裕・高橋 一徳・小林 禎三・片岡 繁雄 (1999). 小規模校における歩くスキー授業の工夫・改善-子どもたちの声を手がかりとして- 僻地教育研究 53 pp67-74

三浦 裕・竹原 祥介・米田 健二・中村 正道 (2006). 北海道上川管内の中学校におけるスキー授業の現状と課題. 僻地教育研究 61 pp1-8

文部科学省 (2017). 小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説総則編

文部科学省 (2017). 小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説体育編

文部科学省 (2017). 小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説特別活動編

〈謝辞〉

本研究を進めるにあたって、協力してくださった連携協力校、その他小学校の先生方と子どもたち、並びに岩手大学三陸復興・地域創生推進機構の皆様へ深く感謝の意を申し上げます。